
風のふくま

夜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風のふくまま

【Nコード】

N3361A

【作者名】

夜月

【あらすじ】

「聖魔戦争」、から約1000年が経ち、いまだに魔物は現れるが、平和になった世界。学園と呼ばれるハンターズ養成機関に一人の青年が転入してきた事により、静かに運命の歯車が回りだす…

プロローグ（前書き）

どうも初めまして！夜月ヨツキという者です。自分の処女作である「風のふくまま」ですが、初めてなので色々と駄目な所がありますが、どうぞ空よりも広く海よりも深いお心で見守って下さい…（汗

プロローグ

遙か昔、まだ人々が平和に暮らしていた頃、“それ”は突然現れた。“それ”は生きる物全てを破壊していった。

人々は“それ”に恐怖し、畏怖を込めて魔物：モンスターと呼んだ。人々は抵抗し、戦った。しかし圧倒的な数と力の前に敵うはずもなく絶望していった…。

その時一人の青年が現れた。彼は仲間達と共に次々と魔物を倒し、遂に魔王を打ち倒した。

これはその後の世界での物語り……

プロローグ（後書き）

まずは読んで下さりありがとうございます！感想や、こちら辺
ダメ…等頂けたらうれしいです。まだまだ未熟者ですがこれからも
よろしくお願いします。

Mission 1

「はぁ……帰って来て早々仕事か。今年は厄年なのかな？」
と歩きつつ一人愚痴をこぼすこの青年、彼の名は睦紫 凧（むつみ） なぎ）、彼を一声で言うなら

「美青年」

である。

容姿端麗、一見すると女性と見間違える中性的な顔立ち、腰まである髪を一つに束ね、彼の歩いた後には振り返らない人がいないと言われるほどである。そんな人々の視線を軽く流しつつ、街の中心にある広場に着くと、ベンチに座り誰かを待ち始めた。

「……それにしても誰が来るんだか」

事の起こりは三日前

「秋人さん！秋人さん！起きて下さい！！……はぁ幸せそうな顔で寝てるし」

凧は今、ある建物の一室にいる。部屋の中は簡素な造りで、ソファと紙の山に埋もれた机があるだけである。そして山の中からは、誰かの寝息が聞こえている。

「はぁ……仕方ない」

そうため息をもらすと、腰に提げていた愛刀

「アスカロン」

別名ドラゴンスレイヤー をその中に刺し入れた。もちろん鞘は腰に提げたままだ。すると、紙の山から勢いよく人が飛び出してき

た。

「はあはあ、凧！！ 殺す気が!？」

と怒りと恐怖が入り混じった叫び声を発しているこの男は、凧の上
司であり、対魔物特別機関“ハンターズ”日本支部の1番隊隊長、
上月 秋人（こうづき あきと）である。

「僕に殺す気があるなら、今頃三途の川にでもいるんじゃないです
か？」

刀を鞘に納めながらさらりと爆弾発言をする凧。

「あはっ、はははは…… 怖い事言うなあ、凧は。」

乾いた笑い声を発しつつ一歩下がる秋人。

「とにかくこれ、報告書です。それから一ヶ月位お休み頂きます」

「いやあ、それがお仕事あるんだけど……」

差し出された報告書を受け取りながら、答える秋人。

「秋人さん、貴方は人の話を聞いてなかったようですね」

「いやいやいやいや！もちろん聞いていたとも、でもみんな出払
つてて凧しかいないんだよ！」

「それなら他の隊の人に任せればいいじゃないですか」

「それが…… 実は上からの命令で、うちの隊しか出来ないんだよ」

「…… わかりました。それで内容は？」

瞬間秋人の顔から表情が消え、仕事の顔になる。

「ハンターズ養成機関である白鳳学園に潜入、そのブロック一帯に
出現するモンスター殲滅及び“亀裂”の調査だ」

「え！？ 亀裂が生じてるんですか？」

「現段階では何とも言えん。だが0（ゼロ）の報告によると、白鳳
学園のブロック内に亀裂が生じている可能性が高いらしい」

“亀裂”とはどこかに存在するとされている、悪魔やモンスターが
支配するとされる冥界と、凧達人間が住む人間界とを繋ぐものであ
る。ちなみに、冥界は聖魔戦争時代の文献を元に存在するとされて
おり、謎に包まれている。

それで大きさは？

「それも現段階では何とも言えん」

わかりました。それで他には？

「今回はある方がお前のサポートをして下さる」

ある方って誰ですか？

「それは着いてからの楽しみだ！！楽しみにしてるよ！！」

……一回締めようか

「あ、それからもう一つ」

なんですか？

「笑った方が可愛いひぎゃあ！」

……

勢いよく扉が閉まり、風が去った部屋には、判別がつかない程顔が腫れ上がった秋人が倒れていたそうだ。

そして今現在、僕の前には一人の女の人が立っている。

「やつほ〜久しぶりだね、風」

この人は檻月 沙紀（おりつき さき）僕の幼なじみである。

ああ、沙紀！久しぶり。三年ぶり位だね？

「うん、その位だね。で、アメリカどうだった？」

そういえばアメリカ留学って事にしといたんだっけ

「風？聞いている？」

一応聞いているよ

「一応って何よ！！」

一応は一応だけど

「意味わかんないし」まあ落ち着いてお土産は荷物と一緒にだから

「ほんとに？やった〜早く帰る？」

単純だなあ

「何か言った？」

……地獄耳か

「いや、何でもないよ。それじゃ行こ」

「うん！」

沙紀は嬉しそうに返事をする、凧の手を取り引きずる形で歩き始めた

「ちよつ、沙紀！引きずらないで！聞いてる？」

……聞こえてないか。まあたまにはこんなのも……ってよくない！
恥ずかしい！

「沙紀……頼むから止まって……」

そんな他愛もない？話をしている内に、檻月家に到着した。

余談ではあるがその間ナンパされた回数、5回。ちなみに一日の過去最高は12回らしい（by秋人）

沙紀の家は閑静な、いわゆる高級住宅街にあった。

「ここが私の家だよ」

「で、でかつ……」

「そんな普通の反応してないで、さっさと入る」

苦笑しつつも大人しく従い、家の中に入る凧。

「お帰りなさい。沙紀、凧さん。」

ドアを開けると、目の前には沙紀の母親である檻月 千鶴（おりつき ちづる）さんが立っていた。

「ただいまあお母さん。ちゃんと連れて来たよ」

「千鶴、ありがとね。それじゃお夕飯手伝ってちょうだい」

沙紀は返事をする、すぐに奥に消えていった。

「お久しぶりですね、千鶴さん」

「お久しぶりです、凧さん。話は秋人さんから聞いています、よろしくお願ひしますね」

ハンターズには1から10番隊まであり、数が小さいほど強くなる。だが一部にしか知られていない隠密機動部隊である0番隊、通称‘

ゼロ」というのが存在する。千鶴さんは表向きは白鳳学園の教師なのだが、実は0番隊隊長である。

「お母さん風く何してんの？」

奥から沙紀の声が聞こえてきた

「ふふつ、それじゃ詳しい話は後ほどで中が上がって下さい」

千鶴さんに連れられて中に入ると、テーブルには料理が並べられている所だった。

「おお！！美味しそ……う」

マジ？

思わず心の中でツッコミ

風さんどうかしましたか？と微笑む千鶴さんが悪魔に見えた……

恐かった……答えが返ってくるのが。

だがあえて聞いた

これ何人前ですか？

「あら、もちろん一人前ですよ」

後に風は語る　あれは確信犯だ、そうとしか思えないほど壮絶だった　と

「沙紀、明日からあるんだからもう寝なさい」

はーいと半分寝ぼけた声を出す沙紀

「おやすみ、沙紀」

うんおやすみ〜

自室に向かう沙紀を見送ると2人の顔が引き締まる

「それで亀裂の大きさの見当はついてるんですか？」

「はいおそらく今はレベル1程度でしょう、ですが最終的にはレベル4までになる可能性があります」

亀裂にはレベルがあり危険度によってレベル1〜5まで分けられる。

「それと明日から学園に通って頂きます」

学園か……

「ランクはBです、これで大体の施設は使用できます」

ランクとはその人の戦闘能力を表す物で、SSS・SS・S・A・B・C・D・Eに分けられる。SSSが最高ランクで順に低くなっていく。

「あ、はいそれにしても用意が良いですね」

「ええ、秋人さんから先週お伺いしましたから」

……

やっぱり一回締めよう、うん

「じゃあそろそろ寝ますね」

おやすみなさい、凧さん

おやすみなさい、千鶴さん

自分の部屋に入ると、荷物のそばには必要な物が全て置かれていた。

おやすみ……か

そう呟くとそのまま眠りについた

その顔に微笑みを浮かべながら……

Mission 1 (後書き)

はい！遂に始まりましたね〜って事で凧くんに来てもらいました！

！ 「よろしくお願ひします、それで何するんですか？」

「もちろん次回予告さ
「はいわかりました。えっと、今回は、凧遂に学園に潜入！そこで見たものは！？」

はいOK！ご苦労

様〜 「あの〜夜月さん、台本に女に変装して潜入って

書いてあるんですけどどういう意味ですか？」

ははっ

……大丈夫だから！全然バレないよ！うん！！

「一回死んだ方

が いいみたいですわ」

うぎゃあああ

ああ…… 「では次回もよろしくね〜」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3361a/>

風のふくま

2010年10月28日07時01分発行